

ふるさと応援団員からの便り

## ソウルで思うこと

中島丈博

東京都在住

下田出身

昭和10年生まれ

10月29日、田内千鶴子生誕百年記念の催しがソウルのプラザホテルで行われました。

田内千鶴子さんは韓国名を尹鶴子(ユン・ハクチャ)といい、戦時中の朝鮮総督府長官の娘として父君の赴任とともに木浦に渡り、キリスト教会で知り合った当時乞食大将の異名であった尹至浩と結婚します。孤児たちの保護活動のために家々の門を叩いては食料などの施しを乞う尹至浩を、木浦の民衆は多少の揶揄を籠めて、乞食大将と呼んだのです。

結婚後、ふたりは孤児院『共生園』を立ち上げ、孤児たちの育成に尽くします。そして朝鮮動乱の只中で夫が行方不明になった後も、千鶴子さんは孤児院を守り続け、1967年10月31日、55才の自らの誕生日に天に召されるまで、不器用なまでに地道なその活動は続けられ、木浦市葬となつたその葬儀には多くの市民が参加して彼女の死を惜しんだのです。

1997年、彼女を主人公とした

『愛の黙示録―尹鶴子の生涯』が戦後初の日韓合作映画として石田えりさん主演で製作され、私が千鶴子さんと同じ高知県出身者ということもあって、子息の尹基氏から依頼されて脚本を執筆したという経緯があり、今回の生誕百年記念の行事に招待されたというわけです。

田内千鶴子さんの凄いとこころは、基氏を含めた自分の子供たちを孤児



「祭りの準備」上映会  
(9月30日、文化センター)

らとまったく区別することなく同等に育てたということですが。

真に孤児たちの母となるためには、血で繋がった母子の感情を捨てなければならぬと決意し、彼女はそれを実行するのです。

そのために基氏らは虱が蟻く孤児たちのベッドで寝かせられ、全く同じ食事、同じ衣服で何らの特別扱い

は許されなかった。それでも実の親子なのだから、時には母親らしい視線、言葉を求めるのですが、一切投げ与えられなかったと言います。

そこまで徹底して多くの孤児の母としての存在でありたい。血の繋がりをだけ重視するのではなく、広く深く孤児たちを愛したいという彼女の熾烈な思いが、後に韓国三千人孤児の母と謳われるようになったのでしよう。そして最後に「梅干が食べた」と言い残して亡くなったときは、紛れもなくひとりの日本人の女に還つたのです。

日韓の問題も領土、領土と言っているうちは血縁のだけに向けられた偏狭な愛と同じではないだろうか、ほんとうに隣国や隣人と手を繋ぎ合つて生きて行くためには、広く寛容な愛で結ばなければならないのではないか、そんな教訓を千鶴子さんの生き方は教えてくれているのではないのでしょうか。

尹基氏は『愛の黙示録』の姉妹編として、この次は父尹至浩を主人公として青春時代から失踪までを辿りながら、園の子供たちを主軸に押し出した映画を製作したいと、開会式の夜の懇談会で発表されました。脚本を依頼された私は光栄に感じながらも頭を悩ましているところだ

(脚本家)